

Noisette Press

現地在住ライターがリアルなパリをお届け

Mai 2025
Numéro 136

5

Parisienne 突撃インタビュー

今月のお客さま
ルモアンヌ・ステファニーさん

年間 400 人にニースを案内！
日本人向け大人気公認ガイドから
南仏を学ぶ

現地ガイドであり、SNSでもニースの観光情報を伝え続けるステファニーさん。プロヴァンスとコートダジュールの違いなど、あまり知られていない南仏の魅力についてお聞きしました。



ニースは200年前から 冬のリゾート地

◆SNSを始めたきっかけは？
元々ニースは200年前からヨーロッパ貴族の冬のリゾート地でした。今は夏に来る方が多いのですが、冬の良さをアピールしようとSNSを始めたのが15年前。コロナ禍では、「フランス人は生きてます！ マスクをちゃんとしています」とアピールするためにインスタライブも始めたんです。そうしたら楽しくって！

◆日本語を学んだきっかけは？
「日本語は絵みたいな文字で面白そう！」と高校で日本語コースを選択しました。まさか文字に3つのシステムがあるとは知らなかったのです（笑）。17歳でパリの大学へ行き、日本語を学び、大阪出身の先生のおかげで日本語が大好きになりました。1年半東京に留学し、ニースに戻ってきました。そこから日本人向けのガイドの仕事始めて18年で、今までに7000人以上の日本人をガイドしています。

◆どうして日本文化が好きなの？
フランスと全てが違うし、古い町並み、昔の女性の着物が好きだから。14歳の時は日本人になって芸者になるのが夢でした。今は御朱印を集め始めています。そして、日本は人が優しいです。あんまり嘘をつく人がいない。フランス人はあんまり真面目じゃない（笑）。

◆じゃあ日本に住みたい？
うーん。日本は大好きだけど、人の目を気にしないといけなから少しプレッシャーかも。いくつになっても好きな色の服を着たいし、ストッキングは履きたくない。自分の子どもにも、「人のことじゃなくて自分のことを考える」って育てていますからね。

プロヴァンスとコートダジュールは 全然違う

◆ニースはプロヴァンス？コートダジュール？
難しいですね。（笑）。ニースはコートダジュールです。南仏には、プロヴァンスとコートダジュールがあります。プロヴァンスで一番有名なのがマルセイユ、アビニョン、エクサンプロヴァンス。

コートダジュールは「紺碧色の海岸」という意味で、諸説ありますが、カンヌからイタリアの国境ギリギリのマントンまでの海岸線です。プロヴァンスより物価が高めで、リゾート地。プロヴァンスはフランスの一部で、コートダジュールの東半分は1860年代まではイタリアだったのでイタリアっぴいんです。

◆気候も違う？
プロヴァンスは内陸部なので冬は寒く、ラベンダーが咲く夏は35度くらいで暑い。それに対してコートダジュールは年間300日晴れ。冬も明るくて雨もあまり降らないから、ルノアールの時代からいろんな画家が冬にやってきて芸術家の町としても有名なんです。

夏は30度、冬は日中は15度くらいで、ホテルは安くて混んでないから、泳がないなら冬がおススメ。私はニースっ子なので海があれば当然泳ぐけど、日本人は夏でも水着を持ってきてない方が多くて最初ビックリしましたね。

◆ニースがパリと違うところは？
ファッションにこだわりがなくて、シンプルな生活が好きなお店。カゴバックを持ってプラプラ歩いてマルシェに行くのが好きな人におすすめです。パリは東京、ニースは神戸のような感じで、海と山があってごはんが美味しくて人が親切。



En Mai, fais ce qu'il te plaît photo by Saori

◆ニースでおすすめの観光スポットは？

エズ村は有名で人気ですね。海に囲まれて、石畳の路地が迷路みたいで、別名「鷲の巣村」と呼ばれています。綺麗なので皆さんが行きたいのが分かりますが、観光地なので夏はすごく混みますね。「ヴィルフランシュ・シュル・メール」というエズ村近くのヨットハーバーは海が綺麗で小さな村やレストランがあってそちらは穴場がいいところですよ。

あとはサン・ポール・ド・ヴァンス。中村江里子さんが結婚式を挙げた教会があります。マントンはイタリアそっくり。海が綺麗でレモンで有名な街で、歴史的にも複雑なアイデンティティを持っている村。このあたりには1000年前から残っている村がたくさんあって、敵が来ないように、カタツムリのように山の上に要塞を建てて、自給自足で暮らしていたんです。

◆これからしたいことは？

少し前にコートダジュールについてのフォト・エッセーを出版しました。今は2冊目を書いています。南仏の食卓がテーマで、私のおばあちゃんのレモンのタルトのレシピや、日曜日は何を食べるかとか、読んでいくうちに観光の参考にもなるような本にしたいと思っています。いずれ、日本でもフランス人相手にガイドを試してみたいな。

Instagram

@stephanie_francetrip



毎週土曜日あさ9時30分から、テレビ朝日で放送。 tv asahi



食材ひとつに、多彩なドラマ。
毎週土曜日に放送中の「食彩の王国」は、身近な「食材」たちが主役。さまざまな食材が織りなす食文化の歴史や産地の風土…。そこに流れる時間をひも解くことで、人と食材のかかわりを探っていきます。

食彩の王国

語り 冨田九子

番組ホームページ www.tv-asahi.co.jp/syokusai

マダム愛の わたくし ミュラン

第136回

代々女性がシェフを務めるクラシックなビストロ

1 932年の創業以来、代々女性がシェフを務めるクラシックなビストロ「Allard」。
 2013年にあのアラン・デュカスの傘下になってからもその伝統は変わらず、メニューも変わっていないとか。お料理はブルゴーニュ地方の料理をメインに、フランスの伝統料理がいろいろと楽しめます。お店の内装はクラシックな雰囲気
が漂うザ・パリ！ 一歩足を踏み入れた瞬間からテンションが上がること間違いなし。
 高級なビストロなのでメインは1皿50ユーロほどなのですが、ランチメニューだとフルコースで食べてもメイン1皿よりも全然お安いんです。前菜に頂いたパテ風リエットは賛否が分かれそうだけれど、私としては脂っこくないのが嬉しい。しかも塩分控えめです。メインは子牛のソテーをココットでサーブ。このプレゼンテーションが良い。友達とシェアしながらワイワイ食べました。ただ、お肉が硬くてパサパサだったんだよね。でも、まあ、この値段ならありかな。デザートはムース・オ・ショコラはさすがアラン・デュカスの

傘下！濃厚で美味しい〜！でもそれ以上に感動したのがミラベルのタルト！さっぱりとしたクリームと頂くのですが、ミラベルの自然な旨みがタルトにぴったりであまりタルトは好んで食べない私ですがつい食べ進んでしまいました。
 こちらのレストラン、お料理を楽しみに行くというよりもフランスの伝統のお料理とその雰囲気を味わいに行くのに価値があると思います。ザ・パリを堪能したい方はぜひランチに行ってみてくださいませ。

- A. 制服のギャルソンに案内されると、一気に気分が盛り上がります。
- B. 前菜のリエットはクセが無く食べやすい。でも少し物足りなさも。
- C. メインはかなりパサパサでしたがたっぷりな量なので、コスト的には最強です。
- D. デザートは見た目以上に超濃厚。
- E. 最高に美味しかったミラベルのタルト。生地がさくさく、ミラベルの自然な甘みが心地よかったです。

今月のハート

料理	♥♥♥♥♥
ドリンク	♥♥♥♥♥
サービス	♥♥♥♥♥
雰囲気	♥♥♥♥♥
コスバ(ランチ)	♥♥♥♥♥

Allard
 41 rue Saint-Andre des Arts Paris 75006
 0143 26 48 23
<https://www.restaurant-allard.fr/>

writer **マダム愛**
 東京で知り合った仏人男性に連れ去られ、気が付けばパリジェヌとやらに。パリのレストランと生活、2つのブログを書いています。

blog **マダム愛の徒然パリ日記**
<http://www.paris777.blog.fc2.com/>

blog **マダム愛のアパートの鍵貸します**
<https://www.madameai.com/>



編集部弾丸ツアー おすすめのパリ 2025 雑貨屋編

1 Petit Pan
 76 Rue François Miron
Instagram @petitpan

中国とデンマークのカップルによるパリ中心に展開するライフスタイルショップ。布を使った雑貨が充実しているので、ブランケットや赤ちゃんのおくるみなどかさばらないプレゼントが好評。天井からぶら下がるモビールも素朴な魅力があり、編集長の家のモビールはもう2代目。

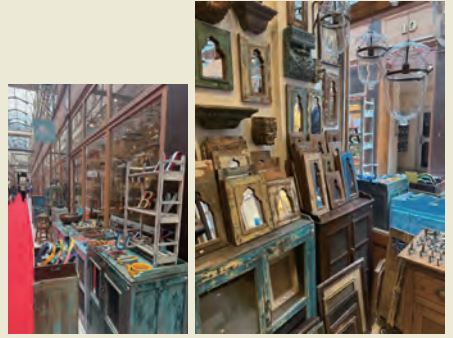
今回は、編集部が愛するパリの雑貨屋さんをご紹介します！

2 Rickshaw
 7 passage du Grand Cerf, 75002 Paris
WEB <https://www.rickshaw.fr/en/>

パッサージュの中にあるインド系インテリアショップ。お手頃な価格の家具があるので、編集長の家の家具はほとんどここでゲット。インド系フレンチテイスト……？

3 fleux
 39 Rue Sainte-Croix de la Bretonnerie, 75004 Paris
Instagram @fleux

10年前はパリ市内に1店舗だったのに、4店舗にまで拡大していてビックリ。おもちゃから食器、インテリアなど何でもある雑貨屋さんです。カラフルでやんちゃな遊び心あるセレクトで手軽なお土産探しにピッタリ。



とびこめ! ミュゼのとびら

今更聞けないフレンチアート

これぞ狩猟民族! 圧巻の剥製!

マシのアルシーヴ通りにひっそりとある狩猟自然博物館。最寄駅はメトロ11号線ランビュト駅。閑静な邸宅にこれほどの剥製があるとは。日本で言うなら国立科学博物館級の所蔵品が、ところ狭しと陳列されています。

パリ留学中、課外授業で行かない限り自ら行くことはなかったであろう、この博物館。外観と展示内容のギャップに驚き、今では好きな博物館の一つになりました。一度足を踏み入ると、フランス人が狩猟民族であったということがまざまざと伝わります。狩猟と聞くと一瞬身構えてしましますが、そこはフランス、狩猟用の武器や道具、動物をモチーフにした美術品や工芸品、動物の剥製などを芸術性豊かに展示し、自然と人間の関わりがよくわかる興味深い内容になっています。

Musée de la chasse et de la nature

狩猟自然博物館
パリ

この博物館もオテルパティキュリエ (Hotel Pateculier)。17世紀のゲネゴー館と18世紀のモンジュラス館という二つの建物からなり、ゲネゴー館は17世紀の建築家マンサールの手によるもの。

博物館の創立者は、実業家のフランソワ・ソメル夫妻。もともと自然や狩猟へ強い関心を持っていた夫妻は1964年に「狩猟自然財団」を設立。時を同じくして、フランスでは当時の文化大臣アンドレ・マルローを中心に、文化遺産の保護に力を入れる動きがありました。荒れて、取り壊しの危機にあったゲネゴー館をどうしたものかと悩んでいたマルローは、ソメル夫妻に、その歴史的建物の救済を依頼。夫妻はそれを修復し、ゲネゴー館を拠点に狩猟自然博物館を開館するに至りました。近年ではコレクションも増え、隣接するモンジュラス館も購入し、博物館は拡張されました。

そしてこの3月、同館は長らく個人コレクション

にあった、写実主義の画家ギュスターヴ・クールベの未公開作品「雪の中の狩猟風景」を入手。クールベの写実主義の中心にある雪景色と緊迫した狩猟の風景の描かれたこの作品は博物館の狩猟絵画コレクションにおいて重要な位置を占めます。12月31日までCabinet du Loupで展示予定とのこと。



writer 妹尾優子

仏語教師の傍、仏文学朗読ラジオ「Lecture de l'après-midi」の構成とナレーションを担当。美術史 & 日本史ラブ。日仏の文学からアートまで深掘りする日々。

HP <https://note.com/tabichajikan/md750819c9bc7>

仏人添乗員リラの 日本リラ散歩



7年前の5月は
バルセロナに行っていた



7年も経ったのか

今年5月は、ノアセットプレスで記事を書き始めて7周年。その間東京内で1回引越して、観光ガイドから翻訳の仕事に転職し、フランスに3回行ってきた。またコロナで世の中が一時的に引きこもり状態になり、誰もいない渋谷のスクランブル交差点を経験した。7年間は、生まれた赤ちゃんが7歳になるまでの期間と想像すると長く感じるけど、自分の人生においてはあっという間に過ぎたように感じる。今回も含めこれまで85の記事を書いてきたのだが、毎月原稿を書くというのは自分にとってどういう影響があるのかについて少し考えてみた。とにかく何かを書かなければいけないと分かっていると、外国で無意識に日常生活を送るのではなく、自分の体験を通じてどこに異文化を感じるか、なぜそういう風に思っているのかを考える習慣が生まれた。普段ならあまり気にしない些細なことでも何かの気づきにつながるのでさらに周りの環境や出来事に注意を払うようになっている。

カルチャーショックや異文化を意識すること以外にも、長く東京に住んで自分自身もどう変わったのか、どういったところで現地の文化に馴染んで、逆にどこでフランス人らしさが残っているのかについて自己分析する機会にもなっている。自分の反応や感情に耳を傾けるチャンスを提供してくれる。また、自分の生まれ育った国とその文化について改めて考えるきっかけにもなる。特定のテーマについて調べて深掘りしたり、フランスのニュースを見たり、歴史を再発見したり。このコラムを書いていなければフランスについても知らなかったことがたくさんあった。最後に日本語の勉強にもなる。7年間経ってもまだ苦戦する時があるけど、定期的な練習になる。また7年後はどうなっているのかな〜。

writer リラ

東京で翻訳者としても活躍する30歳のフランス人女子。持続可能な社会の実現に向けての活動もする。趣味は編み物とペランダの植物の世話。

トモクンの アレコレ、パノコレ、ナンゴコレ〜

存亡の危機にあったパニョレの蚤の市
火事によりとうとう消滅

フランスの多くのメディアは「金属スクラップ市場」と表現していましたが、モントルイユの蚤の市の派生だったパニョレ市の蚤の市が年初に火事で消滅してしまいました。何か怪しい…。政治的な背景が多分にありそうです。

以前ご紹介していますが、モントルイユの蚤の市からあぶれた業者が一丸となり、近くに店を構えたのがパニョレの蚤の市でした。金属片や金属線などを売る店以外にも古い雑貨を売るスタンドがいくつかあり、たまにお宝に出会うことがあるため、僕も通っていたくらいでした。出店者はほぼ100%北アフリカ系。サウジアラビア育ちの僕にとってはスーク(市場)を思い出します。

そんな移民によるつましやかな蚤の市も、昨年1月にパニョレ市が蚤の市の閉鎖を決定して

暗雲が垂れ込めます。一番の問題は、年間5万ユーロもの清掃費用でした。いつ行っても入り口にはゴミがうず高く積み、通り全体にもゴミが散乱していて、パニョレ市にとってはハタ迷惑。そして、周辺の都市計画が閉鎖決定に大きく作用したよう。歩いて数分のポルト・ドゥ・パニョレ駅周辺は、開発地区として新しいビル群が建ち始めています。都市計画を進めることで、財源を増やしたいという市側の魂胆が見え隠れします。議会で蚤の市閉鎖が決定された後、業者に通達され、何組かは姿を消したものの、多くは居座っていました。

そして今年に入り、とうとうピンポイントで蚤の市に点火されました。自然発火とは考えにくい。とにかく約1,000平方メートルが燃え、蚤の市は消滅したのです。将来的にパリ市を拡大させる計画があり、そのためには美しいパリのイメージを壊さないよう整備する必要があるのが大きな理由なのかもしれません。このままでは、モントルイユの蚤の市も一掃されてしまいそう。

写真は、モントルイユの蚤の市の古着を売る

スタンドを写したものの。周りには新品の生活用品を売る店がほとんどで、古いものという古着くらいで蚤の市としては全く見応えが無い。どうにかならぬものかと思えます〜。



writer トモクン

トモクンという名の45歳。在仏27年。ファッションジャーナリスト(業歴17年)は仮の姿で、本当はただの廃品回収業(業歴5年)。詳しくはブログ『友くんのパリ蚤の市散歩』にて。

blog 友くんのパリ蚤の市散歩
<http://tomos.exblog.jp>



第14回

なんでもN.Y.と比較しちゃう、
子連れパリレポート

出産やコロナ禍で足が遠のいていたパリ。N.Y.から6時間と近くなったことや、娘二人が「お母さんが好きなパリを見てみたい」と言い出したこともあり、久々にパリに行ってきました。出発日が近づくにつれ高まる緊張。これは大好きな人に久しぶりに会う気分です。子どもの服を買いそろえたりして。アメリカの蛍光色ドカーン！ なスウェットで歩かせるわけにはいかない、と母の謎の気合に戸惑う姉妹。パリの友人に渡すお土産探しも「チョコもハンドクリームもアメリカのもので喜んでくれるとは思えない」。すっかりアメリカカオリティに自信が持てないお年頃。

そしてついに上陸の日。久しぶりの再会は……最高。わかっているつもりだったけれど、観光地としてのポテンシャルがフリーザ並みに強力。目に良し、口に良し、財布に良しの3拍子。どこを見ても美しく、食べるものは大体美味しく、N.Y.よりなんでも安い。さらに、清潔になった印象です。「地下鉄こんなきれいだった?」「こんなにゴミ落ちてなかった?」「もっとオシッコ臭かったような」など、なんでも(N.Y.比)素晴らしく感じているだけ説も…??

そして一番懸念していた治安の面も、オリンピック効果なのか問題なし。以前パリの街を駆け巡っていたスリ集団を見かけなかった。パリの友人に

伝えると「スリがオシャレになって見分けがつかなくなった」とか「軽犯罪は減った。銃犯罪は増えた」など真偽のほどはわかりませんが、前よりも携帯を持って歩いている人も多し、路上生活者もNYよりも少なめ。ただ、道の真ん中で土下座していたり、泣きながらコップを差し出してきたり、N.Y.よりも感情に訴えかけてくる派の路上生活者が多く、姉妹はビックリ。N.Y.だとゴキゲンで話しかけてきたり、歌っていたりするから。

私の幼稚園生並のフランス語は、赤ちゃん並に退化しており、フランス語で話しかけて英語で返事をされたり、お店のお兄さんがゆっくり一緒に声を合わせてきたりして、完全に「ヨチヨチ〜がんばりまちなね〜」ムード。赤ちゃん可愛いからいいか。

大事なテーマ「トイレ探し」。もともと、トイレの少ないパリ生活で腸内フローラが死んだのか、腹が弱くなってしまったこともあり、今回もかなり心配。しかしついに私は強い味方を見つけました。公衆ボックストイレ!! 以前からあったけど、汚かったり壊れていたり使わなかった。が、今回初挑戦です。……室内ビショビショ。そう、これは使用後に個室全体ビシャビシャにして洗うタイプのトイレなのです。便座もビショビショ。背に腹は代えられないと用を足し、ホツとしたもつつかの間、流すボタンが起動せず。壊れる。打つ手なしで、流さずに外に出るとドアが閉まって、ビシャー! と中から水が噴射される音が。廃棄者として責任を持つと、と音が鳴りやんだ後再び個室に入るとピッカピカ。無臭。洗浄機能は壊れてなかった! はっはー! もう怖いものは何も無いぜ!

writer 吉野亜衣子

ラジオ局を辞め、夫の留学についてパリへ。帰国後、日仏文化交流のための NOISETTE を設立。2022年で設立10周年。2024年春よりNY在住。

HP <https://note.com/noisettepress>

podcast <https://podcasters.spotify.com/pod/show/cafenoisette>



クルーズ船から見た
エッフェル塔▶



◀トイレの中も撮影したけど掲載自粛

スマホも大画面テレビもアプリをダウンロードするだけ
フランスで日本のテレビ

BS 50ch
1週間無料体験

アプリをダウンロードして簡単登録で即時視聴

- 地上・BS・CS50局ライブTV
- 過去4週間番組の見逃し視聴
- 週間ランキングVOD500本
- 過去4週間番組の予約録画可
- スマホからテレビ画面に転送可
- TV端末契約でスマホ視聴無料



年間契約
TVDongle
無料

モバイル USD 199.9/年- テレビ+モバイル USD 239.9/年- 月額あたり USD 16.6-
サポートメール [日本人受付] admin@kaitekitv.com サポートページ <https://kaitekitv-support.com>



編集後記

春からホーチミンに住んでます。フランス領だったこともあるベトナム。仏の香りを感じたい! と意気込んできましたが、今のところパインミーのサクサクバゲットでのみ、仏を感じています。美味です! (編集K)

編集後記

表紙写真のタイトル「En Mai, fais ce qu'il te plaît」は「(4月はまだ寒いから服装に注意)5月はお好きなように」という諺とか。つまり衣替えですね? 窓を開けて掃除に衣替えにちよいDIYなど一気にやっつけます。(デザインF)

パリに暮らす猫パリーちゃん・リリちゃんと
ゴキゲン指揮者キョリのほのぼの生活



パリーちゃん通信

アペロだよ、人生!

サマータイムに切り替わり、どんどん日が長くなるパリ。これからの季節の一番の楽しみは、何と言っても長〜い夕暮れどきをのんびり楽しむアペロ時間。仕事の後カフェのテラスで仲間達とワイワイやるのも楽しいし、ちょうど今はお庭の花が満開なので、おつまみを作って(イカのフリットやチクワの磯辺揚げなど揚げ物系が好き♡)リリちゃんと旦那さんとテラスでアペロは最高の時間。最近のマイブームは、一昨年庭のピワをラム酒で漬け込み、飲み頃になってきた自家製ピワ酒。これに氷を入れてロックで飲んだら私は超ご機嫌よ! あ〜、楽しかった。今日も一日生き切ったあ〜。ありがとう〜! と、今日も乾杯!



writer 押田杏里

日仏混合アマチュア合唱団「バリア・ブロッ合唱団」を主宰する指揮者。パリで猫のリリちゃんと旦那様と「今を生きる」をモットーに暮らしています。

Instagram @abricotp

